

理想
の
妻

作 Tira

プロローグ

金曜日の夜とあって、駅前の居酒屋はとても賑わっていた。スーツを着た男性が大半を占めているが、女性の姿も散見できた。芸能界の話で盛り上がる若者達のテーブルがひと際目立つ。

十ほどあるカウンター席で背中を丸め、陽気にはしゃぐ彼らを見ていた勝河直哉（かつかわなおや）の肩を叩いた有藤悟（ありとうさとる）は、大げさに顔を覗き込むような仕草で口を開いた。

「勝河、今日はやけに大人しいじゃないか」

「んん……そうか」

「一次会で飲みすぎたのか？」

「いや、そういう訳じゃないんだけどさ。あのテーブルで騒いでいる連中、楽しそうだなと思って」

直哉はグラスに入ったビールを一口飲むと、また騒がしい彼等に視線を移した。入社して間もない歳だろうか。リクルートスーツを着た男女が、顔を赤らめながら少々迷惑なほどの音量で親しげに話していた。

「お前も混ざってくれば？ でも、美人妻がいるから浮気なんて出来ないな」

「そうだな……」

目を細めながら有藤と視線を合わせない直哉に首をかしげる。

「んん？ どうしたんだよ。ノリが悪いな。奥さんと何かあったのか？」

「いや、別に」

「お前の奥さん、俺達の職場じゃ華だったんだ。泣かすような事はするなよ」

「分かっている。分かっているよ」

直哉はビールを一気に飲み干すと、手で口を拭いながら深く溜息をついた。

何か悩み事があるのだろう。そう感じた有藤は、彼のグラスにビールを注ぎながら枝豆を一品、注文した。

「実は一次会から気になってたんだ。何となく元気が無くなって。俺にも話せない悩みか？」

「いやあ。そんな事ないよ。ま、別に悩んでる程の事じゃないし」

「聞かせてくれよ。俺、そういうの大好きなんだ。いや、別にかからかう訳じゃなくてさ、色々相談に乗るのが好きなんだ」

「有藤は前からそうでもないな。人の悩みにちよつかいを掛けたがる」

「そ、そういう言い方は無いだろ」

「冗談だよ。それで随分と助かっているんだ。やっぱり相談相手っていうか、悩みを打ち明けられる相手がいるってのは幸せだよ」

「だろ！　じゃ、言っちゃまえよ」

再度、直哉の顔を覗き込んだ有藤は、彼の肩を軽く数回叩き揺さぶった。グレーの背中が揺れると、直哉は軽く笑みを作り、ビールを一口飲んだ。

「実はお前の言うとおり、典子の事なんだ」

「おお。やつぱりそうか。さては喧嘩でもしたのか？」

「いや、結婚して半年、喧嘩なんて殆どした事が無いよ」

「じゃあ何だ。まさかお前、彼女以外に好きな女性が出来たって言うんじゃないだろうな？」

少し怪訝な表情をした有藤に、直哉は軽く首を振った。

「そんなんじゃないよ。俺は典子しか愛していない。会社を辞めた彼女は妻として十分に尽くしてくれているよ。家事も卒なくこなすし、通っている料理教室で腕を磨いた夕食はとても美味いんだ」

「……何だよそれ。傲慢にしか聞こえないぞ。悩みなんて全然無いじゃないか。いや、それ以上の事を望むなんて贅沢すぎるぞ。美人で家事も卒なくこなして、料理だって美味しい。他に何を望むんだ……」

「望むって言うかさ、まあ……そうだよな」

今度は直哉が有藤のグラスにビールを注いだ。丁度頼んでいた枝豆が来たので、一つ口にする。その後、また賑やかなグループに視線を送った。そんな彼を暫く見てい

た有藤は、小さく囁いた。

「あれか？ 夜の事か？」

「んん……まあな」

「全然してないのか？」

「いや、してるよ。ただ……」

「……なんだ？」

「彼女は全然積極的じゃないんだ」

「なるほど。でも、積極的過ぎる女性もきつと大変だぞ」

有藤は彼の悩みが然程、大事ではないと分かるやと軽く咳払いをし、枝豆を数個口にしました。自分だって何人かの女性と夜を共にした事があるが、アダルトビデオに登場するような積極的な女性に出会った事は無いし、それほど魅力を感じないのだ。

「まあ、彼女は元々派手なタイプじゃなかったし、真面目で礼儀正しいイメージがあったから領けるよ。でもさ、そんな彼女が好きで告白し、結婚したんだろ？ さっきも言ったけど、職場の華だったんだぜ。俺だってそうだし、他に彼女を射止めたいと思っていた男は多かつたんだ」

「それは分かっているよ。もちろん、俺も彼女の誠実で真面目なところに惹かれたんだ。もちろん、容姿のポイントも大きいけどさ」

「完璧な人間なんていないさ。それに、自分にとって都合の良い事ばかりじゃない

し」

「だよな。まあ、俺の贅沢って事だ」

「……それで終わっていいならこれ以上聞かないけどさ。良かったら教えてくれよ。彼女がどんな感じなのか。場所を変えようか？　ここは五月蠅過ぎる」

「……そうだな。聞いてもらえるだけでも気持ちが悪くなるよ」

二人はコートを羽織ると、勘定を済ませて外に出た。雪が降りそうな程、どんよりとした雲が暗い空を覆っていた。冷えた空気が風で踊ると、肌が切れそうになる。

「いつものショットバーでいいか？」

「ああ」

歩いて五分程。深い茶色の木製扉を開けると、カウンターに数人の客が座っていた。シックで小洒落た空間が気に入った二人は、何度もここを利用している。

「いらっしやい。お二人さん、今日は早いね」

「まあ、ちよつとね」

六十は優に超えているだろうか。スキンヘッドに白い髭を蓄え、小さな銀縁の眼鏡を掛けた小太りのマスターがカウンターから出てくると、二人掛けの小さなテーブルにコースターを用意してくれる。何も言わずとも、雰囲気から二人だけで話がしたいと分かったようだ。

「随分と冷えてただろ。二人とも、いつものでいいかい？」

「ああ。勝河もそれでいいか？」

「もちろん」

窓の外には小さな雪が降り始めていた。控えめのジャズが店内を包み込み、耳に心地良い。コートを脱いだ二人は、しばらくの間、かじかむ手を擦りながら窓の小雪を見ていた。

「どうぞ。じゃ、ごゆっくり」

「ありがとう。マスター」

軽くグラスを合わせた二人は、お気に入りのジントニックを一口飲むと、それとなく視線を合わせた。

「この店に通い始めたのは、どのくらい前だったけ」

「三年位前か。有藤が酷く酔った後に、フラフラになりながら入ったんだ」

「そうだったっけ。俺、その時の記憶が無くてさ。確か、随分とマスターに迷惑を掛けたんだよな」

「ああ。あの時のお前は大変だった。タクシーもまともに乗れないくらい泥酔してたからな」

「ははは。まっ……若気の至りって事で」

「俺達も、もうじき三十だな」

「ああ」

「そう言えば有藤。お前は結婚しないのか？　今の彼女と付き合い始めて一年くらいになるだろ」

「そうだなあ。香織にも急かされてるよ。結婚雑誌を買ってくるからな」

有藤は苦笑いをする、グラスを口にした。

「そろそろ身を固めろよ。じゃないと愛想付かされるぞ」

「まあな。選り好み出来る立場じゃないし」

「選り好みって、彼女は美人じゃないか。結婚式に来てくれた時は、一際目立ってただろ」

「お前の奥さんには及ばないよ。ああ、そうだ。こんな話をする予定じゃなかった。勝河の話が聞きたかったんだ」

「……まあ、そうだな」

直哉はジントニックを一口飲むと、背凭れに上半身を預け、深い溜息をついた。

「あのさ。お前、彼女とやるときはどんな感じなんだ？」

「んん？」

有藤が身を乗り出すと、直哉も同じように身を乗り出し、顔を近づけた。

「セックスだよ。セックス」

小声で問い掛けると、有藤は周りを気にしながら口を開いた。

「どんな感じって？」

「色々な体位でやってるのか？ 彼女、結構喘ぎ声を出すのか？」

「えらくストレートな質問だな」

「多少なりとも彼女から腰を動かしたり……騎乗位とかするのか？」

「まあ……彼女のプライバシーにも関わる事だから、全ての質問には答えられないけど、逆にお前のところはそうじゃないって事だな？」

「……ああ。その通りだ。マグロ状態って奴さ」

「へえ。流石にそこまで酷くは無いな」

「そして恥かしがり屋なんだ。セックスは夜、暗くなってから。部屋の電気をしっかりと消して。ラブホテルでも同じさ。明るい場所でなんてした事無いし」

「なるほどな。真面目な彼女だったけど、そこまで極端だとは思わなかったなあ」
有藤は背凭れに背中を預けると、持っていたグラスを一気に空けた。

「マスター、もう一杯」

その声に、マスターが軽く手を上げた。

「実は風呂も一緒に入った事が無いんだ。完全入れ替え制さ」

「へえ。そういう風に聞くと、折角結婚したのに勿体無い感じがするよな」

「それだけじゃないんだ」

直哉が言い掛けると、マスターが新しいグラスをテーブルに置いた。

「ああ……ありがとう」

空になったグラスを渡した有藤は、「それだけじゃないって？」と聞き直した。

「服装も、地味って言うか……肌を隠したがるんだ」

「まあ、寒いからな」

「そういう意味じゃなくてさ。体の線を隠すような服ばかりを選ぶんだ」

「スタイル良さそうなのに。結婚式で着ていた純白のウェディングドレス、最高に綺麗だったよな」

「あのドレスは、まだマシかもしれない。普段着は必ずスカートなんだ。しかも、足首まで丈があるロングスカート。足を見せようとしなんだ」

「それも、恥かしがり屋だからか？　そういうファッションが好きなんじゃないのか？」

「分からないけど、多分恥かしいからだと思う」

直哉は深い溜息をつくとき、有藤と同じように背凭れに凭れ掛かった。

「なるほどな。折角の美人も、そんな調子じゃ魅力が半減しそうだ」

「全くだよ。もっと自分を曝け出してくれたらいいのに……最初はそれ程でも無かったけど、最近は特に意識するようになってさ。さっきの居酒屋に居た賑やかなグループ。あそこで盛り上がっていた彼女達を見ると羨ましくて」

「そういう事だったのか。まあ……少なからず同情するよ」

グラスを口にした有藤は、腕を組むと顎を上げて目を瞑った。何か考えているよう

だ。その様子を見ていた直哉は、両手を頭の後ろで組んだ。

「何、考えているんだ？」

「んん？ まあ……お前に教えてやってもいいかなあと思ってたさ」

「何を教えるって言うんだ」

「ああ。ある会社の話さ」

「んん？ ある会社って？」

「夢の様な事を叶えてくれる会社さ」

「……どういふ事だよ」

「俺も、知人からこっそりと教えてもらったんだけどさ」

目を開けた有藤は、テーブルに両肘を着き、組んだ手の上に顎を乗せると直哉を見つめた。

「俺さ、今の彼女と付き合う前に、ある女性に猛烈な片想いをしてさ。彼女と付き合いたい……というか、ぶっっちゃけセックスしたいと思ってたんだ」

「へえ。それで告白したのか？」

「まあな。でも、やっぱりダメだった」

「高嶺の花だったんじゃないのか？」

「彼女の周りには、絶えず男が付きまどっていたよ。金持ちが多かったけどな」
「金持ちか……。なるほど、そりゃ仕方が無いな。俺なら告白しないけど」

直哉はジントニックを口に含むと、舌で転がしながら喉に流し込んだ。

「それでも彼女とセックスしたかった俺は、さっき話した会社にお願いたんだ。彼女とやらせてくれって」

「仲介してくれる会社なのか？」

「いや、そういうレベルじゃなくて、本当にやらせてくれたんだよ」

「お、おい有藤。お前、まさか……」

眉間に皺を寄せた直哉に、有藤は「お前、俺が何か危ない事をやらかしているって考えているだろ」と言い、軽く頭を左右に振った。

「そうじゃないのか？」

「まあ、ちよつと近いかもしれないけど。でも、あの会社に頼んで良かったと思って。普通に考えたら絶対に有り得ない事だしさ。彼女自身は俺とのセックスなんて全く興味ないだろうから、俺だけが楽しんだって感じかな」

「話がよく分からないな。お前がセックスしたのは本当に彼女だったのか？」

「ああ。正真正銘、彼女だったよ」

「へえ。どういう方法で彼女を説得したんだろうな」

「説得したんじゃないくて、無理やりセックスしたって言う方が正しいか」

「やっぱりそれって強姦じゃないか」

「いやいや。本人は全く知らないから」

「本人が知らない？ 眠らせてつて事か？」

「うん。眠っているのかな？ ちゃんと彼女も喋るし腰も振ってくれる。喘ぎ声もたまらなかつただけどなあ」

話の筋が読めなかつた。しかし、片想いの彼女とセックスをしたという事実は確か
なようだ。何か裏があるのだろう。

「かなり怪しい会社だな」

「聞いているだけじゃ、そう思うだろな。一度会ってみろよ。TOSの人に。連絡先
を教えてやるから」

「TOSって言うんだ。その会社」

「ああ。これが連絡先さ」

有藤から連絡先が書かれたメモを受け取った直哉は、首をかしげながらも財布の中
に仕舞った。

「これ、詐欺の会社じゃないのか」

「まあ、会ってみれば分かるさ。お前の悩みも解消できると思うから」

「悩みが解消できる？ 全く話が繋がらないけど、有藤が言うなら——」

こうして二人は、一時間程酒を酌み交わすと、家路に着いた。

妻、典子

「今日は少し遅くなるかもしれないから」

「ええ。夕食は食べる？」

「食べるよ。じゃ、行ってくる」

「いつてらっしゃい」

有藤から話を聞いて、ちようど一週間経った金曜日。

玄関で典子と別れた直哉は普段どおり会社で仕事をこなし、程なく定時を迎えた。あの日から毎夜のように考えているが、なかなかTOSという会社に連絡出来ずにいた。有藤にもう一度詳しく話を聞こうかと思っていたが、生憎彼は今週、出張で不在が続いているため話はしていない。

有藤を信じていいのか――。

駅に着いた彼は、普段とは逆方向の電車に乗り、十分ほど揺られた。そして大きな駅に辿り着くと、改札を出て指定された店を探した。すでにあたりは暗くなり、繁華街のネオンが眩しく思えた。

「……何処だ？」

方向が掴めず、幾つかの路地を歩き続けると、ようやく店の名前が見つかった。小さなカフェのようだ。待ち合わせの時間から十五分程過ぎている。直哉は焦る気持ちを抑えながらガラスの扉を開いた。

「いらつしやいませ。お一人様ですか？」

カフェに入ると、若いウェイトレスが出迎えてくれる。

「いや……」

ウェイトレスの背後に幾つかのテーブルとカウンターがあり、カウンターには三人の客が座っていた。そして、一番奥のテーブルに二人組みの男女が対面ではなく、横に並んで座っている。その男性は茶色のベレー帽を被っているが、直哉と視線を合わせると立ち上がり、軽く会釈をしてきた。

「あそこにいる人と待ち合わせていたんだ」

直哉も軽く会釈をすると、ゆっくり彼等の元に歩いていった。

「勝河さんですね」

「はい、遅くなって申し訳ありません。お店の場所が良く分からなくて路地を彷徨っていました。目の前に表通りがあるのに……。私、方向音痴なんです」

「いえいえ。別に構いませんよ。どうぞお座りください」

「失礼します」

男性はベレー帽を取ると、優しい微笑を見せた。歳は直哉よりも少し上だろうか。

スポーツをしているのか、大きな体つきと日焼けした肌。茶色のジャケットが少し窮屈そうに思えた。そして隣に座っている女性は更に歳が離れているように見える。三十代半ばだろうか。黒い眼鏡を掛け、少し釣り目で冷静な雰囲気を漂わせていた。背筋を伸ばし、無表情で直哉を見上げている。

「どうも初めまして。私はTOSの榊山（さかきやま）と申します」
「TOSの石垣（いしがき）です」

男性が名刺を差し出すと、隣に座っていた女性も立ち上がり、軽い会釈で自分の名を名乗った。

「ああ……。勝河です」

つられて名乗った直哉は、名刺入れから二枚取り出し、差し出した。

そして脱いだコートを背凭れに掛け、対面で座ると榊山が笑顔で話を始めた。

「有藤様からのご紹介でしたね。どうですか？ 信じられましたか」

「いや、正直信じるのが出来ません。昨夜も寝ながら考えていたんですけどね。申し訳ありませんが、何かのトリック——例えば催眠術に似た感じだと思っています。まあ、それでも私の望みは解消出来るでしょうけど」

「皆さん、最初はそうおっしゃいますよ。それが自然な考え方ですからね」

榊山と名乗る男性は、椅子に凭れ掛かると女性と顔を合わせた。

「お客様、ご注文は？」

「どうぞ。ここは私達が払いますので。いや、交際費として用意しているのです」

「そうですか。じゃあ、ホットで」

「かしこまりました」

ウエイトレスは会釈をすると、店の奥に入っただけ。カウンターに座っていた中年男性が席を立つと、会計を済ませて出てゆく。店内を見回すと、客は直哉達だけになっただけ。

「さて……勝河さん。我々は表立った企業ではありませんので、……ここで会った事は誰にも話さないで頂けますか」

「……ええ、構いませんけど。元々、話すつもりもありませんし」

「そうですか。石垣さん、勝河さんにご説明をお願いしますか」

「そうですね。私から説明するわ」

彼女は半分ほど飲んでいたコーヒーカップを角に置くと、両肘をテーブルに乗せて話を始めた。

「私達がどの様な企業か、有藤様からお聞きですか？」

「聞いているというか、あいつが一度だけ御社に依頼した事については聞きました。内容は、片思いだった女性と、その……出来たということでした」

直哉は少しためらいながら、小声で話した。

「勝河さんは、その彼女に催眠術を掛けたと思っっていますね」

「ええ。先ほども言いましたが、その類だと思っています」

「では実際に見て頂いた方が早いですね」

「催眠術を見せて頂けるんですか？」

「いえ、催眠術ではありませんよ」

榊山がカバンからタブレット状の薬のような物を取り出した。

「これを使えば、他人の体に憑依することが出来るんですよ」

「憑依？」

「ええ。憑依です」

石垣が頷いたところで、ウェイトレスがコーヒーを持ってきた。

「以上で注文はよろしいでしょうか。では、ごゆっくり」

誰に向けてでもない会釈をしたウェイトレスは、また店の奥に戻っていった。

「憑依って……」

「勝河さん、これは肉体と魂を一時的に切り離すことが出来る薬なんですよ。私が誰かに憑依して見せますから、お好きな人を指定してください」

「——本気でそんなことを言っているんですか？」

「もちろんですよ。先ほどのウェイトレスに憑依して見せましょうか。結構綺麗な女性でしたよね」

「いや……」

直哉はこの馬鹿げた話に付き合う気になれなかった。イタコじゃあるまいし、そんな菓を飲んだ位で他人に憑依出来る筈がない。いや、イタコすら信じていない彼は、非現実的すぎると感じていた。

「あまり好みの女性では無かったですか？」

「そういう問題じゃなくて」

大体の察しはついている。二人がこのカフェを指定した時点で、すでに根回しが出来ているのだ。ウエイトレスが、恰も憑依されたような行動を取り、信じ込ませる。そして、信じたところで勧誘し、金をむしり取る目論見だろう。なぜ有藤がこの怪しい会社を紹介したのか分からないが、そう簡単に騙されてたまるかー！。

直哉は店の外に視線を向けた。何人もの人達が行き交う中、青いジャージとズボンを来た女子が二人、携帯電話を操作しながらゆっくりと歩いている姿があった。吐く息の白さが店外の寒さを感じさせた。遅くまで部活をしていたのだろうか。互いに顔を見合わせると、一人が手を振りながらバス停に向かって走っていった。

「それじゃ、あの青いジャージを来たショートカットの女の子でお願いしますよ」

少し嫌味っぽく話しかけると、榊山は「いいですよ。じゃあ憑依してきますので」と菓を口を含み、グラスに入った水で流し込んだ。彼は背凭れに上半身を預けると、ゆっくりと目を瞑った。

「あの女の子、勝河さんのお知り合いですか？」

「全然知りませんよ。赤の他人です。たまたま目に留まったから指定しただけです」
「もちろん、私達も知らない女の子です」

「そりゃそうでしょ。たまたま歩いてあるの子が御社のエキストラだったらビックリです。どれだけ金を使っているのかと疑いますよ」

心中では全く信じていない直哉は、ニヤニヤと笑いながら石垣を見つめた。そんな直哉の態度に無反応な彼女は、榊山のカバンから小さな御札のような紙を取り、彼の手に貼り付けた。

「何ですか、それは？」

「他の魂が入ってこない様にするための呪符のような物です。これを貼り付けることで、彼以外の魂が入って来る事はありません」

「へえ。随分と凝っているんですね」

「既に榊山の肉体には魂が入っていませんから、浮遊霊達の格好の器になります」

「浮遊霊まで登場ですか。そりゃ大変だ」

あまりの幼稚さに笑いまでこみ上げてくる。これで俺を信じさせて、幾らぼったくろうと思っているのだろうか。

直哉はそう思いながら、一口だけコーヒーを飲むと帰る準備を始めた。

「どちらへ？」

「いや、帰るんですよ。こんな幼稚な勧誘には付き合っていられない。有藤も可哀想

な奴だな。俺に相談してくれたら高い金払って騙される事無かったのに」

「信じる、信じないは勝河さんの自由ですが、有藤様は喜ばれていましたよ。もちろん、安価とは言いませんけれども。勝河さん、とりあえず後ろを見ていただけますか」

「今度は何ですか？」

席から立ち上がった直哉が振り向くと、扉からジャージ姿の女子が入ってくる姿が見えた。そして、ウエイトレスと一言話した後、重たそうなスポーツバックを肩に担ぎ、彼の元に歩いてきた。

「勝河さん、お待ちせしました。この子ですよ」

直哉は言葉を失った。彼が指定した女子が目の前にいる。石垣を見ると、至って平静な表情をしていた。

「帰ろうとしていたんですか？ まあ、座ってくださいよ。時間は大丈夫でしょう」

「えっ……。ま、まあ……」

女子に促され、もう一度席に着いた。

「驚いたでしょ。これが憑依です」

隣の席に座ったジャージ姿の女子が、その歳には似合わない敬語で話しかけてくる。呪札が貼られた榊山は、眠るように目を閉じたまま、全く動く気配が無かった。

「少しは信じてもらえましたか？ こうして我々は他人の肉体を自由に操る事が出来

るのです。有藤様の場合も、我々の仲間が指定された肉体を操り、望みどおりの事を
して差し上げたのです」

「ほ、本当に……神山さんなのか？」

「そうですよ。私、ラグビーで鍛えた体ですけど、今はこんなに華奢な女の子になっ
ているんです」

目の前で眠るように座っている大柄な男性が、こんな小柄な女子の肉体に憑依し、
操っているなんて――。

直哉はどうしようもない興奮で、鼓動が激しく高鳴った。ショートカットの女子
は、ウェイトレスの注文に「私、お水だけでいいです」と可愛らしい声で答えた。

そして、足元に置いていた大きなスポーツバックから生徒手帳を取り出した。

「秋ノ瀬美菜穂って名前みたいですね。住所からすると、この近くにある学校の様
です。それにしてもこの参考書の量はすごいですねえ。歳から考えたら来年は入試か
な。部活と両立出来るように頑張って勉強しているんでしょう」

「そうなん……ですか」

直哉は随分と年下の美菜穂に敬語で答えた。ショートカットで愛くるしい表情。視
線を下ろすと、青いジャージに包まれた小ぶりの胸が可愛らしかった。

「どうです。信じてもらえましたか？」

「ま、まあ……。私が選んだ女の子だし、勝河って名前も知っているはずがないし。し

かし……どうなんだろうか？ 気持ちには信じたいと思いますけど、本当に信じて良いのか分かりませんよ」

「じゃあ……。今時の女の子は、人前でこんな事をしますか？」

「えっ……。な、何を！」

美菜穂はクスツと笑いながら、ズボンのウエストゴムを前に引つ張つて見せた。

「覗いてもいいですよ。今は私がこの子の意識を含めて支配しているので、何も覚えていませんから」

信じられなかった。見ず知らずの女子が、自らの手で大切な股間を曝け出している。直哉は思わず身を乗り出し、青いズボンの中を覗き見た。白いパンティまでが可愛い手で引つ張られ、薄つすらと生えた陰毛が見えている。

「触りたいなら触ってもいいですよ。普通なら警察のお世話になる行為ですけどね」
ショートカットの彼女がニヤリと笑ってウインクする。

「ほ、本当に……大丈夫なのか？」

「大丈夫ですよ。でも、ウエイトレスには見つからない様にしてくださいね。後が面倒ですから」

その言葉に周囲を見回した直哉は、そつとジャージのズボンに手を忍ばせた。彼の指が肌に触れると、美菜穂はピクンと身体を震わせ、「手が冷たいですね。でも大丈夫ですから、どうぞそのまま奥に」と言った。

何とも柔らかい下腹部。そして指先に感じる陰毛。美菜穂は何事も無かったかのように入ズボンから手を離すと、肩幅ほどに足を広げた。彼の手だけがズボンの中に入り込んでいた状態だ。

「まだ濡れていませんから、クリトリスを執拗に弄らないでくださいね。濡れていない状態で触られると結構痛いんですよ」

そう言って、美菜穂は両手をジャージに差し入れ、胸の辺りを弄り始めた。

「スポーツブラか。勝河さん、私が今、何をしているか分かりますか？」

「えっ、な……何をって」

「スポーツブラの中に手を入れて乳首を弄っているんです。この肉体を興奮させるために」

「そ、そんな事……」

「直に濡れますから、好きな様に触ってください。ああ、勝河さん。ちょっと待ってくださいね」

美菜穂が少し上を向きながら目を瞑った。

「はい、大丈夫です。この子、まだ学生なのに処女じゃないですね」

「しょ、処女じゃないって、どうして分かるんですか」

「意識を同調する事で、本人の記憶が分かるんですよ。同調出来るかどうかは憑依する熟練度で決まります。私は結構たくさんの人間に憑依してきたので、こんな感じで

他人の記憶を盗み見ることが出来るんです。だから、本当は先ほどの様に、生徒手帳を見なくても分かっちゃうんですけどね」

「し、信じられない……」

「本人に成りすまして、普段どおりの生活も行えます。ただし、薬で憑依出来る時間は限られているので、いつまでも本人に成り代わることは出来ません。それに……」

「記憶がない状態が続くと、本人が不審に思います」
途中から石垣が説明を始めた。

「もし、いつの間にか一週間が過ぎていたらどう思うでしょうか。記憶障害だと思いつむかもしれません。人によつてはノイローゼになる可能性もあります。ですから、憑依する時間をある程度決めていくのです」

隣では榊山が美菜穂の手を操り、自慰をさせている。目を閉じたまま、時折「んっ」と小さな吐息を漏らしている姿に興奮が止まらない。彼女の足が更に開かれると、ズボンの中に忍ばせていた手が動かしやすくなる。それと同時に、指先に滑りを感じた。

直哉は石垣の話を聞きながら、手をもう少し奥に忍ばせた。それとなく指を動かしてみると、彼女の体がビクンと震えた。

「この体、スイッチが入ったみたいですよ。勝河さんの指がクリトリスに当たると、とても気持ちが良いですよ」

胸を弄っていた手がジャージの裾から出てくると、テーブルの上に添えられた。

「そのまま弄っていても構いませんよ。石垣さん、説明の続きを……」

そう言うのと、股間を弄る勝河の手を右手でズボン越しに掴み、秘部に押し付けるように動かし始めた。

「話を続けてもいいですか？」

「あ……はい」

指先の粘りは確実に増えている。中指が割れ目の間に減り込み、一層の温かさを感じた。美菜穂の顔を見ると、気持ちよさそうに「んっ……あっ」と小さく喘いでいた。その表情がたまらない。

「勝河さんが体験している事は現実です。有藤様も、勝河さんと同じ体験をされました。私達を信じて頂けますか？」

「……信じますよ。色々言ってますみませんでした」

「いえ、何時もの事ですから。では勝河さん、私達のサービスを利用する目的を教えてくださいますか」

「分かりました。その前に……」

直哉は隣で喘いでいる美菜穂の顔を見た後、ジャージのズボンに視線を落とした。細い手が必死に彼の手を掴み、股間に押し付けている。

「興奮して、話が出来ないんですけど」

「んっ……すいません勝河さん。もう少してイケそうなので、クリトリスを激しく刺激してもらえませんか。私は声が出ないように両手で口を塞いでいますから」

「えっ……イ、イクッて……」

「この体がオーガズムを迎えそうなんです。憑依すれば、私の様な男でも女性のオーガズムを体感する事が出来るんですよ。すみませんがお願いします」

「男なのに、女の快感が得られるというんですか」

美菜穂がテーブルに肘を突き、両手で口を塞いだ。開いていた足が更に大きく開き、股間を突き出すように、椅子に浅く座りなおした。言われるままに滑った指を動かし、硬く膨れたクリトリスを弄ると、美菜穂の足がビクビクと震えた。目を閉じ、眉を歪めた彼女が息を荒げ、両手の中で「んっ、あっ、あっ」と喘いでいる。

そして、ほんの暫くすると全身がビクンと大きく震えた。ズボンの中にある手が愛液塗れになっているのが感覚で分かる。

「はあ、はあ、はあ、ああ……」

何度か深呼吸した彼女が、ウツトリとした表情で直哉を見つめた。その表情には可愛らしさが残っているが、不思議と大人びた印象を感じさせた。

「ふう。ありがとうございます。まだ経験が浅い女子ですけど、思ったより気持ちよかったですよ」

美菜穂のオーガズムを堪能した榊山は、「勝河さん、私の愛液で濡れた手、拭いて下

さい」と、スポーツバックからタオルを取り出した。男であるのに、【私の愛液】という言葉を使う事に違和感を覚えると共に、妙な興奮を覚えた。

「ありがとうございます」

受け取ったタオルで愛液を拭き取った直哉は、彼等に話し始めた。

「妻の典子について——なんですよ。私にとつては良き妻です。自慢するわけではありませんが、典子は私と同じ会社に勤めていた社員で、職場では何人もの男性から声を掛けられていました。真面目で大人しい性格、そして女子中学、女子高と、男のいない環境で育ったためか、男に対しては随分と警戒していたようです。私との付き合いは、仕事で悩んでいた彼女にアドバイスをした事から始まりました。私自身、不釣り合いだと思っていたので、恋愛感情は持っていませんでしたが、彼女は私に好意を持ってくれたようでした。そして、暫く経ったある日、ダメ元で彼女に告白しました。すると、彼女は無言で頷いてくれたんです」

「なるほど。清いお付き合いですね」

「はい。付き合い始めて一年経った頃でしょうか。結婚することになりました。今は専業主婦として私を支えてくれています」

「結婚してどのくらい経っているのですか？」

「半年です」

「じゃあ、まだ新婚ですね」

「ええ」

「聞いている限りでは、別に私達が必要とは思いませんが」
石垣の問いかけに、直哉は少し間をおいて答えた。

「先ほども言いましたが、典子は真面目で大人しい性格です」

「勝河さんが言わんとしている事は分かりますよ。要は、セックスに関する内容です
ね」

「そういう事です」

「奥さんにどうなってもらいたいのですか？」

「典子は私がしたいと言えば、拒みません。ただ、夜になって電気を消した状態でなければしたくない様です。もちろん、彼女はベッドに仰向けに寝たまま。私が愛撫し、濡れたところで始めます」

「俗に言う、マグロ状態なんですね」

「ええ。正常位以外はしたがりません。きっと恥ずかしいんでしょうね。必死に喘ぎ声が漏れるのを我慢しています。本当は、もっと典子を見たいんです。そして、彼女には積極的になって欲しいんです」

「そうですか。内容はよく理解できました」

「すいません。こんな所で話すことじゃなかったですね」

「いえ。こちらから聞かせてくださいとお願ひしましたから。勝河さんの希望を叶え

ることは簡単です。隣にいる彼女の様に、我々が憑依し、勝河さんの思う妻を演じれば良いだけですから」

「可能……なんですね」

石垣は榊山が持ってきたカバンから一枚の資料を取り出し、テーブルの上に置いた。

「これが料金表になります。憑依してから一時間で十万円、三時間で二十五万円となります」

「い、一時間で十万円……ですか」

「この値段設定。高いと感じるかもしれませんが、それ相応のサービスを提供していると思っております」

直哉は料金表を、目を細くしながら眺めた。

「内容によってはお断りすることもあります。例えば、憑依した本人に成りすまして殺人を依頼される、その他、社会的に問題になるような依頼は受け付けられません。我々の手に掛かれれば、戦争を起こすことも可能ですから」

「……確かに」

彼女が言う意味は良く分かる。それに比べれば、俺が依頼する内容なんて可愛いもんだ。そう思ったが、一時間で十万円という金額に腰が引ける。

「勝河さん。今回は有藤様からのご紹介という事で、三十分だけですが無料で対応さ

せて頂きます。もし、お気に召されましたら、次回から有料でのご利用ということでしょうかでしょう」

「試せるんですか？」

「ええ、三十分ですけど」

「そ、それなら是非お願いしますっ」

直哉は身を乗り出して頭を下げた。三十分もあれば、積極的な妻を見ることが十分に出来るのだ。

「承知しました。では……そうですね。明日、土曜日の夜、奥さんが寝た後に憑依しましょうか。寝ている間なら気づかれることもありませんから」

「分かりました。明日の夜ですね」

「はい。有料でご利用の場合は、先ほど榊山が渡した名刺のメールアドレス、または電話でご連絡ください」

「じゃ、私はこの子を返してきます。勝河さん。奥さん以外に、こうして他人の体とセックスしたい場合にもご利用いただけますよ。この前は、同僚の妻と関係を持ちたい男性が利用されました」

「それは……すごいな」

まだ大人の情事をほとんど知らない女子から聞く内容ではない。直哉は、心に湧き上がる興奮を必死に抑えつつ、椅子から立ち上がった。

美菜穂が先に店を出てほんのすぐ、榊山がゆっくりと目を開いた。

「お待たせしました。じゃ、帰りましょう」

三人して店を出ると、美菜穂が首を傾げながら駅へと向かう姿が見えた。

「石垣さん、そろそろ体を返した方が？」

「そうね」

「え？」

直哉は二人の会話に耳を疑った。

「実は彼女、石垣さんじゃないんですよ。石垣さんが憑依しているだけなんです」

「えっ？ えっ？ そ、それじゃあ……会う前からずっと？」

「そういうことです。初めてのお客様には、男女ペアで対応する事になっているんですけど、今日は生憎、女性社員が出払ってしまってますね。石垣さんは男性なんです」

榊山が説明した後、石垣が口を開いた。

「この肉体は伊吹鈴江という名前です。そこのビルに勤めているOLですよ。だから名刺もお渡し出来ませんでした」

「ぜ、全然分かりませんでした」

「彼女の口調を真似て喋っていましたから。いやあ、私自身はもう五十三になります。いい歳ですが、こうして若い女性に憑依してお客様の依頼を受けていますよ」

「五、五十三歳……」

その言葉に、直哉は目を見開いた。五十三歳の男性が目の前にいる女性に憑依していたなんてー。言われなければ、全く気付かなかっただろう。

彼女はビルの壁に凭れ掛かると、「それじゃあ勝河さん。まずは三十分で、この価値を見出してください」と言い、目を閉じた。その後、体をビクンと震わせると、全身の力が抜けたように見えた。

「じゃ、明日の夜をお楽しみに」

榊山が会釈をし、駅に向かって歩き始めた。その後姿を暫く眺めた後、石垣が憑依していた伊吹という女性に視線を移すと、彼女は辺りをキョロキョロと見ながら、首を傾げていた。恐らく、自分は今まで何をしていたのかと思っっているのだろう。胸元に手を当てながら、小走りにビルの中へと入ってゆく。

「……やっぱり、憑依されていた間の記憶はないんだ」

そう思いながら、コートの襟を立てた彼は、心を躍らせ家路に着いた。

「ただいま」

「お帰りなさい直哉。お仕事お疲れ様」

「ああ、腹が減ったな。先に食べたのか？」

「ううん、まだよ。きつと、そんなに帰りは遅くならないかなって思っ」

「そっか。ごめんな。じゃあすぐに食べよう」

「今日はクリームシチューを作ったの」

「へえ。体が温まるよ」

典子は紫色をしたタートルネックの長袖シャツに、同じく、少し淡い紫のストールを肩から羽織っていた。濃いベージュのロングスカート。足首までを隠す、その丈の長さが、彼女の足の長さを物語っていた。質素で大人びた雰囲気似合う、彼女らしい服装だ。だが、その生地には隠された素晴らしいスタイルを見せつけるような衣装も着て欲しい。直哉はそう思っていた。

夕食を取った二人は、交代で風呂に入った。彼女は明るい場所で自分の裸を見られることを恥ずかしながら、結婚して半年が経った今も、一緒に入りながらなかった。最も彼女の素肌を見ることが出来るのは、海やプールに行った時だ。

彼女はいつも、ワンピースの水着にTシャツを着込んでいたが、尻から足に掛けては、その美貌を存分に曝け出していた。最初はそれだけでも嬉しかったし、他の男にジロジロと見られるくらいならーなんて思っていたのだが、いざ結婚して自分の妻になった今、彼の欲求は更に高い位置にあった。

典子が、自分の思うような行動を取ってくれたら、どんなに素敵だろうか。それを実現してくれるのが、TOSだ。直哉は明日の夜が待ち遠しくて仕方が無かった。

「なあ典子。今日は……いいか？」

「……ええ。でも」

「分かってるよ。電気は消すから」

寝室にあるベッドの上。典子は白いパジャマを着て、恥ずかしそうに丸まっている。電気を消しカーテンを閉めると、裸になって典子の上に覆いかぶさる。暗闇の中、二人の吐息だけが聞こえる。

「あつ……」

典子が小さく喘いだ。パジャマのボタンが外され、競りあがったブラジャーから零れ落ちた乳房に直哉の舌が這う。Dカップはある肉塊を揉みしだき、勃起した乳首を口の中で丁寧に転がす。

「んっ……ふう」

身を振らせる典子の頭を掴み、彼女の唇を舐める。すると、柔らかい唇が開き、彼の舌を受け入れた。

「んくっ……んっ。んんっ」

激しいディープキスをしながら、器用に白いパジャマのズボンとパンティを脱がせると、彼女の股間が濡れていることを確認した。

指先に生温かくねっとりとした愛液を感じる。

「入れるよ？」

無言で頷いた彼女の足がゆっくりと開くと、直哉は股の間に体を割り込ませた。そして、いきり立った肉棒を掴み、彼女の膣へ照準を定めた。

「あっ……はあ」

少しずつ肉棒が減り込んでゆく。そして根元まで入ると、腰を振り始めた。

「はあ、はあ、はあ」

直哉の息遣いが激しくなる。典子は右手の人差し指を噛みながら、彼の肉棒を受け入れていた。

「んっ、んっ、んっ」

鼻に掛かった喘ぎ声が彼女の口から小さく漏れる。その声を聞くために、上半身を倒し、彼女の頭を抱きしめながら必死に腰を振った。

「んふっ……んっ。うっ、うっ、あっ……んっ」

喘ぐ声を聞かれるのが恥ずかしいのだろう。噛んでいた指を解放し、掌で口を覆っている。その手を遠ざけようとすが、すぐに口元に宛がわれた。

「はあ、はあ……イ、イクッ！」

直哉は肉棒を引き抜くと、彼女の腹に射精した。彼女とのセックスはとても気持ちがいい。しかし、物足りないのだ。彼女の体についた精液をティッシュで拭き取り、抱きしめると、彼女も同じように抱き返してくる。互いの温もりを感じながら、直哉は小さな声で話し掛けた。

「典子、気持ち良かったか？」

「ええ。すごく気持ち良かったわ」

「それじゃ、もっと表現してくれればいいのに」

「そんなの……恥ずかしすぎるもの」

「俺、もっと典子が喘ぐ声を聞きたい」

「……ううん。私、やっぱり恥ずかしいわ。私はこうして直哉と愛を確かめられるだけで十分なの」

「そっか……」

それ以上の事は何も言わなかった。これが二人の、当たり前前のセックスだった。

カーテンを開けると眩しい日差しが入ってくる。窓の外は青空が広がっていた。典子は「おはよう直哉。朝食はパンでいい？」と、布団に潜り込んでいる彼を揺すりながら話し掛けた。

「ううん。それでいい」

「分かったわ」

布団から顔を出すと、白いパジャマの後ろ姿が部屋から出て行った。

「うああ〜」

思いつき背伸びをし、置時計を見ると九時を回ったところだ。あと半日程で理想の妻が現れる。そう思うと心躍る気分になった。

「今日は天気が良いから何処かに行かないか？」

「ええ。私、ちよつと服が見たいと思つてて」

「いいよ。ショッピングモールに行こうか」

食パンの焼けた、少し芳ばしい匂いがリビングを包み食欲をそそる。

「直哉。何か良いことでもあったの？」

「えっ？ どうして」

「だって何だか嬉しそうな表情をしているから」

典子が食パンをかじりながら微笑んだ。いつの間にか頬が緩んでいたのだろう。直哉は軽く咳払いをすると、「会社でちよつとね」と、ごまかして見せた。

「そうなの。会社を辞めてから半年経つけど、もう懐かしい気分になるわ」

「へえ、皆元氣だよ。そう言えば、他の女性社員達と外に出たりしないよな」

「だって皆、働いているもの。休みは色々と思うし。メールのやり取りはしてるけどね」

「もし遊びに行きたいなら、俺のことはいいから遊んで来いよ。たまには懐かしい会社友達と会うのもいいだろ」

「それって私と一緒にいるのが嫌つてこと？」

冗談めいた表情で見た典子に、彼は笑いかけた。

「俺はいつも典子といたいと思ってるよ」

「ほんとに？ それなら……嬉しいけど。私はまだ、直哉が思うような奥さんにはなれないから」

夕べに話した事を気にしているのか、彼女はそう言った。

「典子は理想の妻だよ。皆、羨ましがってる。俺も典子と結婚できて幸せだよ」

そう強く言った。それは本心に間違いないが、今夜を意識しての言葉でもあった。

「ありがと。ねえ直哉。お昼は家で済ましてから行く？ それとも外で食べる？」

「外で食べようか」

「ええ、分かったわ。すぐに準備するねっ」

朝食を食べ終わった彼女は軽く食器を洗うと、身支度をした。直哉は着替えを済ませると、リビングのソファアに座り、ゆっくりと目を閉じた。瞼の裏に、あの時の出来事を映し出す。まだ年端も行かない女の子に榊山という成人男性が憑依し、好きな様に操っていた。声は本人であるのに、言葉は敬語を使う大人の口調。ジャージのズボンに差し入れた温かさは、まだ掌に残っているように思えた。そして、もう一人の女性に憑依していた五十三歳の男性。男に憑依されているとは露知らず、本人だと思つて話を進めた。あんなことをされると、身の回りにいる人間は本人なのか、操られているのか分からなくなる。金持ちならば、女優やアイドルの体に憑依させ、楽しん

でいるのかもしれない。そんな風に思った。

「お待たせ」

「ああ、行こうか」

化粧を終えた典子はとても綺麗だった。モデルと言ってもおかしくない顔立ち。セミロングの黒いストレートの髪が肩に掛かり、大人びた雰囲気をかもし出している。彼女は足首まで隠れるブラウンのワンピースに白いカーディガンを羽織っていた。直哉の運転で、家から二十分ほどの所にあるショッピングモールに移動した。月に一度は訪れるため、勝手知ったるものだ。店内に近い駐車場に車を停めると、二人して洒落たアパレルショップに入った。今は冬物が大半で、セーターやコート等のバーゲンが行われていた。

「ねえ、このコートはどうかしら？」

白いコートを羽織り、直哉に見せる。彼は「いいんじゃない」と、微笑んだ。典子はいつも、体の線が見えないような服を選んで来た。それは付き合っていた時から分かっていたので構わないのだが、出来ればもっとタイトな服を選んで欲しいと感じていた。美しいスタイルを持ちながらも、何かコンプレックスを持っているのかもしれない。

この後、典子は別のコートと膝を隠す丈のスカートを購入した。

いつもは休日がとても短いと感じる直哉だが、今日ほど長く感じた日は無かった。

外食を済ませて家に戻り、二人でDVDの映画を鑑賞する。ソファーに並んで座る典子の顔を見つめた彼は、徐に彼女を抱きしめた。

「典子っ」

「えっ！ ど、どうしたの？」

「したい」

「い、今？」

「ああ」

「で、でもまだ明るいし……映画、見ないの？」

「何か我慢できなくなってきた」

「ね、ねえ直哉。夜まで待って。夜になったら……しようよ」

「我慢できないんだ」

「だ、だって……じゃあ、ホテルに行く？」

「それでも構わない」

「どうしたの？ 今日は朝から様子がおかしいわ」

「典子を……愛しているんだ」

「直哉……」

典子はいつものより情緒不安定な彼を抱きしめると、彼の運転でインターの近くにあるラブホテルへ行き、愛し合った。もちろん、部屋の電気は全て消して――。

この時間をどれだけ待ち続けたことか。実際には大した時間ではないが、彼にとつては果てしなく長い時間に思えた。夕食と風呂を済ませ、一段落後の寝室。鏡台で髪を整える妻の姿を見ながらダブルベッドに潜り込んだ直哉は、「今日はちよつと疲れたな。早く寝よう」と声を掛けた。

「そうね。でも今日はビックリしちゃった。明るい内にホテルに行くなんて」

「ごめんな。自分でも良く分からないけど、どうしてもしたくなつたんだ」

「ううん、別にいいの。私も……嫌じゃないから」

彼女は一旦止めていたブラシをまた動かした。そして暫く後、電気を消して直哉に添い寝した。

「やっぱり布団の中は温かいな」

「そうね。こうして一緒にいる時間が好き」

「俺もだよ」

お互いに抱きしめ合うと、軽くキスをする。しかし、それ以上の行為に及ぶことはなかった。

静まり返った部屋に、カーテンの隙間から月明かりが漏れている。しばらく会話のない状態が続くと、妻の小さな寝息が聞こえ始めた。彼に背を向けている典子の肩を軽く叩いたが、反応はなかった。時計を見ると十一時を過ぎたところ。そろそろ来るのではないかと思ひ、天井を眺めていた。積極的な典子を想像すると、肉棒に血液が

張り、硬く勃起する。心の中で、早く来てくれと思いつつ事、二十分程。

不意に典子がベッドから起き上がり、部屋の電気を点けた。暗闇に慣れた目にはとても眩しい。

「勝河さん、お待たせしました」

彼が上半身を起こすと、典子は両手を前に揃え、軽く会釈をした。その表情は、妙な営業スマイルに見える。

「あ、あの……」

「TOSの榊山です。奥さんの体に憑依しました」

その言葉に、彼の鼓動が一気に高鳴った。

「いやあ、綺麗な奥さんですね。化粧をしていなくてもこの顔とは……本当に美人です」

鏡台に顔を映した典子が、両手で頬を摩りながら笑顔を作った。

「ええと……榊山さんですよ。その口調で喋られると妙な違和感を覚えますよ。自分の妻なのに、妻じゃない感じですよ」

「そうでしょうね。まあ、皆さんそうおっしゃいますよ」

「それにしても……やっぱりすごいなあ」

「ありがとうございます。奥さんはすっかり寝ているようですね。この状態なら、何をしてでも大丈夫ですよ」

典子を操る榊山は、彼女の手で鏡台の椅子を引き、腰を下ろした。

「さて、私は丁度十一時半に憑依しましたから、十二時までの三十分間、勝河さんが望む奥さんを演じますよ。たしか、積極的な奥さんになって欲しいとおっしゃっていましたね」

「ええ！ その通りです」

「どうします？ すぐにセックスをしますか」

「え〜と……」

そう言われると迷ってしまう。しかし、この時間を一秒でも無駄にしたくない。

「じ、じゃあそうして下さい。電気を付けたまま。そうっ、電気を付けて、妻の裸体を見ながらセックスがしたいです」

「分かりました。時間もあまりありませんから、勝河さんも全部脱いでもらえますか。奥さんのパジャマも脱ぎますね」

榊山は彼女が着ているパジャマのボタンを外し、肩から足元に落とした。そして、ズボンも脱ぐと、下着姿を直哉に披露した。

「いやあ、本当に綺麗な体をしていますね」

全裸になった直哉は、目の前に立つ妻の下着姿に頗る興奮した。こうして明るい場所での妻の下着姿をじっくりと見たことがなかったのだ。

「それでは始めますか」

両手を背中に回し、ブラジャーのホックを外した典子が、肩紐を抜きながらベッドへにじり寄ってきた。

「ねえ直哉。仰向けに寝てくれない？」

その声色は、いつもの典子になっていた。ブラジャーに包まれていた胸が曝け出されると、すでに乳首が勃起しているのが見て取れた。それにしても、これだけ鮮明に妻の胸を見たのは初めてだ。肉棒がこれ以上ない程、硬く勃起している。

「今日は私がしてあげるわ。直哉は大人しく寝ていてね」

「は、はい……」

まるで風俗にでも行った様な気分だ。自分の妻なのに、思わず丁寧な返事をしてしまった。

彼女は直哉の上に覆いかぶさると、彼の首筋を舐め始めた。

「うっ……」

くすぐったい様な気持ちいい様な感じだ。彼の体をじっくりと味わうように舐める典子は、徐々に胸板まで下がると、小さな乳首を硬くした舌で刺激した。

「くっ……」

「気持ちいい？ 直哉はいつもこうして私の乳首を舐めるのよ。小さくて可愛いわ」
口の中に含み、吸い付きながら舌で転がす。その気持ちよさに、彼は思わず「ふわあ」と、情けない喘ぎ声を出してしまった。

彼女の手が勃起した肉棒を掴み、ゆっくりと扱いてくれる。まさに理想の展開だった。

「直哉のオチンチン、すごくたくましいわ。大好きよ」

「の、典子っ」

「イキそう？ でも、手コキじゃ勿体無いでしょ。フェラしてあげる」

「えっ！ ほ、本当に？」

「ええ、大丈夫よ」

直哉は戸惑った。妻の体を操っているのは男だ。なのに、フェラだなんてー。

しかし、そう考えたのは一瞬であった。典子は肉棒を握りながら、玉を口に含み、生温かい舌を使って刺激し始めたのだ。

「うわ……す、すごいっ」

「直哉も舐めてみる？ 私のオマンコ」

彼女は体を反転させ、シックスナインの体勢を取った。目の前に白いパンティを穿いた妻の股間がある。彼女も興奮しているのか、割れ目の部分に染みが出来ていた。

直哉はその染みのある生地をゆっくりと押してみた。生地越しにもヌルヌルとした股間の様子が感じ取れる。

「んふっ……。パンティを押し込まないで、直接触って欲しいな」

そう言うと、典子は亀頭にキスをし、ゆっくりと口内へ飲み込み始めた。

「うあああ……」

生温かく、湿った空間に肉棒が包まれてゆく。膣とは違った気持ちよさに、直哉は体をビクンと震わせた。肉褌の代わりに、少し硬い口内と、蛇の様に肉棒へ絡みつく舌がたまらない。彼女は口を窄ませ、肉棒に吸い付きながら、頭を上下に動かした。下腹部から太ももに掛けて典子のサラリとした髪が触れてこそばゆい。

「んっ、んっ、んふっ、んんっ……。直哉のオチンチン、すごく美味しいわ。どうして今までフェラしなかったのかしら」と言い、フェラチオを続けている。

「はあ、はあ、す、すごいっ」

典子の口でもらう初めてのフェラチオは、極上の気持ちよさであった。もしかしたらセックスよりも気持ちいいかもしれない。喉の奥まで飲み込み、ジュバ、ジュバツといやらしい水音を口から奏でている。あの真面目で恥ずかしがり屋の妻が、ここまで積極的になってくれるなんて――。

滑らかな生地に包まれた、むっちりとした丸いお尻を目の前にし、直哉は至福の時を過ごしていた。触らずとも、パンティの染みは大きくなってゆく。フェラチオしているだけで、典子の肉体は興奮しているのだと思った。

「んくっ……ねえ直哉。私の口とオマンコ、どちらに射精したい？」

普段からは信じられない言葉が妻の口から出てくる。彼は「このままじゃすぐにイキそうだから、典子のマンコで頼むよ」と言った。

「うふふ、いいわよ。じゃあ騎乗位でしてあげる」

典子は体を反転させて跨ると、彼の下腹部にゆっくりと腰を下ろしていった。わざとパンティを脱がず、指でずらして挿入するようだ。

「普段は見れない私の肉体、よく見ててね」

亀頭が膣口に触れたかと思うと、そのままズブズブと飲み込まれてゆく。典子は

「あふん……」と艶のある声を漏らすと、彼の下腹部に座り込んだ。

「うううっ！」

「ふふふ、気持ちいい？」

「あ、ああ……」

彼女は自ら胸を揉みつつ、足のバネを利用して体を上下に振り始めた。ニチャニチャといやらしい音を膣が奏でる。部屋の光に照らされた彼女の裸体はともいやらしく、セクシーに思えた。勃起した乳首はまだピンクがかっていて、彼女の清楚さを残しているようだった。その乳首を指で摘み、コリコリと弄る典子は、「この肉体、それほどセックスの経験はないのに、とても気持ちがいいわ」と、三者的な喋り方をした後、「あつ、あつ、ああんっ。いいわっ、すごく気持ちいいっ！」と激しく喘ぎ始めた。これほど大きな喘ぎ声を聞いたのは初めてだ。そして頗る興奮する。眉を歪め、自分の上で身悶える妻。もうこれ以上は我慢出来ない。そう思った直哉は、「も、もう出るっ！」と叫ぶと、全身に力を込めた。

「あ、あ、んんっ。あふうっ——」

彼の上から降りた典子が、手で激しく肉棒を抜く。すると、十秒もしないうちに尿道から激しく精液が噴出した。

「ああっ、あっ。はあっ、はあっ、あっ……うはあゝっ！」

「すごいわ。こんなに出して。お昼も出したんでしょ」

直哉は大きく息を乱すと、大の字になって全身の力を抜いた。

「ねえ見て」

ほっそりとした指に付いた白い精液を彼に見せた典子は、その指を口内に運び入れた。

「えっ……」

「んふっ。直哉の精液、いっぱい出たけど、少し薄いわ。やっぱりお昼に出しちゃったからね」

「そんな事までして、大丈夫……なのか？」

「大丈夫よ。臆に射精して欲しかったけど、知らない間に妊娠したら本人が驚くでしょ。だから口からお腹に入れてあげたのよ。興奮した？」

「あ、ああ。すごく興奮したよ」

「良かったわ。それじゃ、そろそろ時間だから、本当の私に戻らないと」

直哉が時計を見ると、十二時まで後五分になっていた。

「後五分あるじゃないか。いや、ありますよ」

「このままの格好じゃまずいでしょ。だから元の姿に戻らないとね」

典子はティッシュで股間を拭くと、随分と濡れたパンティも幾らか拭き取った。

「このシミ。本人が気付くかも知れないわ。適当にごまかしてね」

そう言うと、ベッドを降り、ブラジャーを着け始めた。

「あっ、待ってください。せめてその姿を携帯でっ」

彼は慌てて携帯電話を取り出すと、カメラモードに切り替えた。

「いいわよ。私の裸、綺麗に撮ってね」

ブラジャーを足元に落とし、白いパンティ一枚で色々なポーズを取る。その様子は、まるで本物のモデルのようであった。そんな彼女の姿を、何枚かの写真として収めていく。

「すごい……」

「私はコンパニオンやレースクイーンに憑依したことがあるので、この手のポーズはお手のものなんですよ。勝河さん、そろそろいいですか。本当に時間が無くなりましたので」

「コンパニオンやレースクイーン……」

「ええ。ちなみに今、流行のアイドルグループにも憑依したことがありますよ」

彼女——榊山は手早くブラジャーを着けると、典子が着ていたパジャマを身につけ部